

津ライスニュース

平成27年産水稻 作柄報告版 (通算第101号)

平成28年2月26日

津地域農業改良普及センター

電話:059-223-5103

平成27年産水稻の作柄

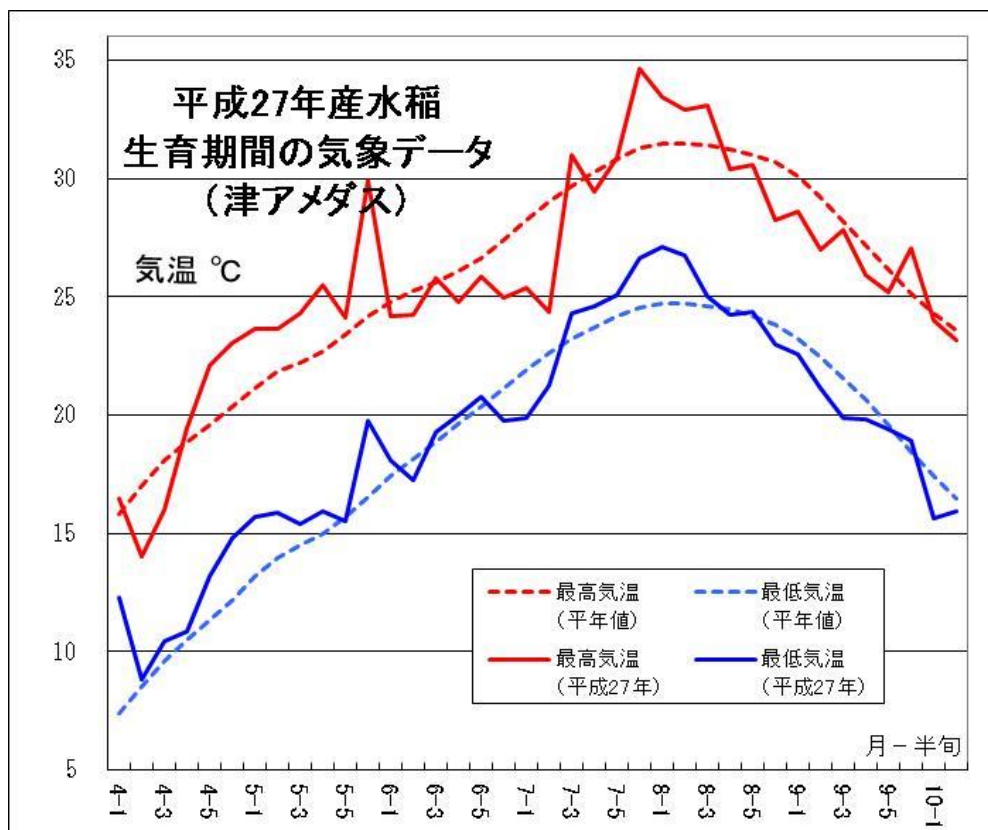
作況指数98(三重県及び中勢)の「やや不良」。
日照不足による白未熟、カメムシによる着色粒多発。

気象経過

<気温>

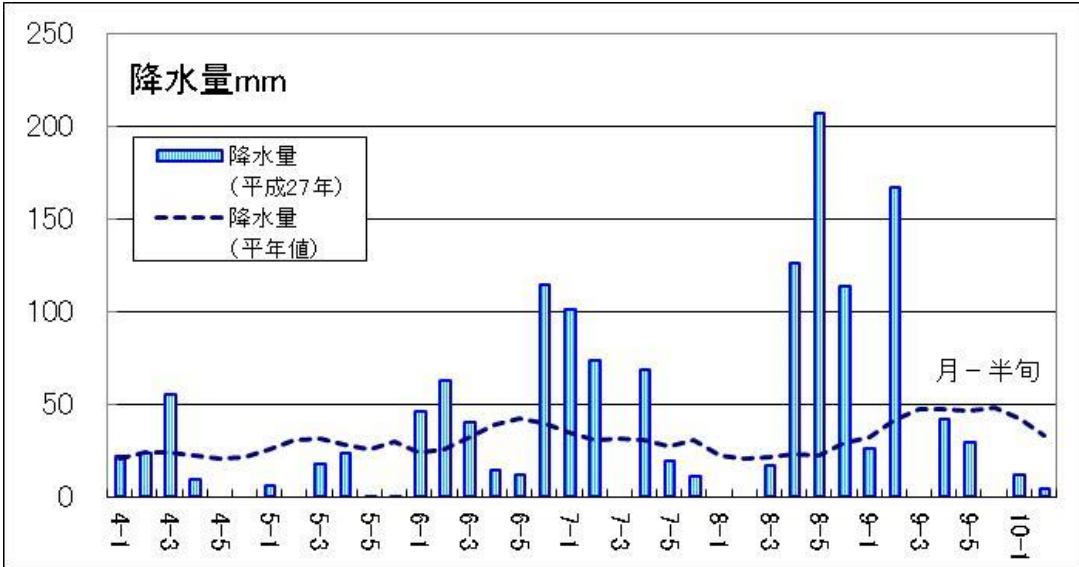
4月中旬以降、気温は高めに経過し、特に5月末頃の気温が高くなりました。

6月に入り最高気温を中心に低温傾向となりました。7月中旬頃から8月中旬までは高温傾向が続きましたが、その後は平年よりやや低い気温が続きました。



<降水量>

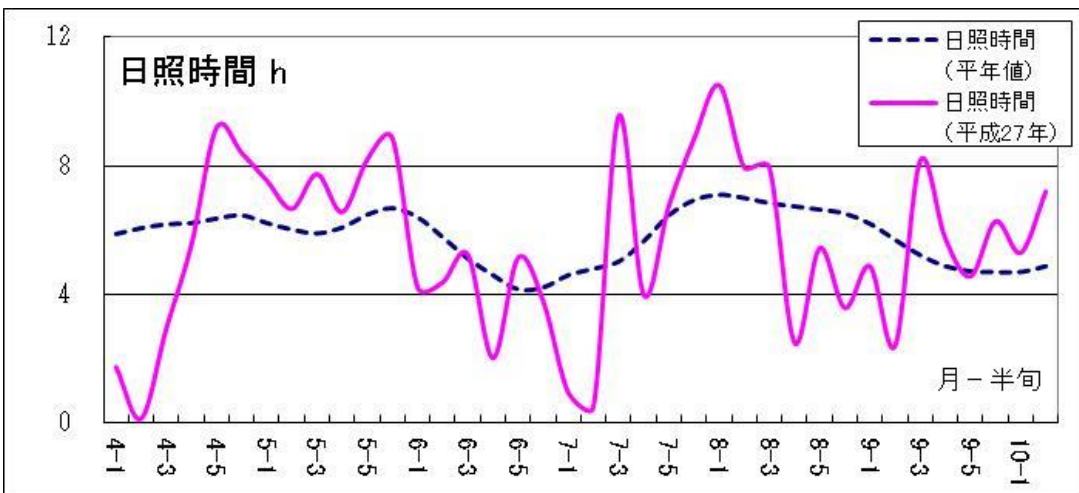
4月中旬に一時雨が多かったものの、その後の降水量は少なく、6月に入って雨が降るようになりました。6月末から7月は停滞する前線の影響で降雨量がかかり多くなりました。8月上旬が一時的に寡雨、その後は台風等の影響もあり、降雨が多くなりました。



<日照時間>

4月中旬以降、晴れた日が多くなりましたが、6月入ってからは一転して曇天傾向が続きました。7月下旬からは晴れた日が多くなりました。

8月中旬から9月上旬は雨も多く、日照不足傾向となりました(8/15~9/15の日照時間は平年の76%)。



生育経過

<管内の概要>

本年は3月以降、雨の日が多かったことから、用水は確保されていて、代かき作業等は順調でしたが、4月上旬の日照不足により、苗丈の長い苗が多く見受けられました。

津管内の田植え作業は、植え始めがやや遅い傾向が見られましたが、概ね4月下旬から5月上旬にかけて、早植え栽培の田植作業が順調に行われました。

本田での生育状況は、例年見られるような低温・強風による植え痛みがほとんど無く、初期生育も概ね順調でした。ただし、日照時間が多く雨が少ない天候なので、水の出入りが少ないほ場では、藻類の発生がやや多く見られました。

本田での初期生育は順調で、前年同時期と比較すると葉齢の進展はやや早く、草丈・茎数もやや多い状況となっていました。

水不足の影響から、中干し作業に躊躇するようなほ場や地域も見られていましたが、6月8日頃の梅雨入り以降の雨により、中干しも随時開始されました。

6月上旬から7月中旬頃までの日照不足、多雨、最高気温が平年を大きく割り込んだことなどにより、稲体の充実度は劣る結果となったと思われます。

出穂時期は平年より早い傾向でした。

7月16、17日の台風11号の襲来により、稲葉身の褐変や出穂の早い稲で穂擦れ等が観察されたこと、また、8月中旬以降の登熟後半時期に低温傾向、多雨、日照不足により、倒伏の多発や籾粒充実不足により減収になったものと思われます。

収穫時期もほ場のぬかるみで作業に支障をきたす場面が多く見受けられました。

<早期栽培の概要>

早植え栽培(4月下旬～5月上旬移植)の水稻は、4月～7月は比較的温暖に推移したことから初期生育は順調で例年より1週間程度早く出穂期を迎えました。8月上旬に接近した台風の影響およびその前後の降雨による倒伏被害が全域で見られました。山間地域では獣害被害も散見されました。また、8月～9月上旬にかけては日照不足で登熟が遅れ、品質が低下しました。収穫期には降雨が続き、収穫作業は平年よりやや遅くなりました。

<普通期栽培の概要>

普通期栽培の水稻では6月中旬以降の少雨の影響が心配されましたが、生育は順調で出穂期は平年並みとなりました。8月上旬の台風による倒伏被害は少なかったようですが、穂ずれによる褐変籾や不稔籾の発生が散見されました。また、早期栽培と同様に8月～9月上旬にかけての記録的な日照不足の影響による登熟不良が散見され、品質は低下し、大幅な減収となったほ場も多かったです。

<生育基準田等の調査結果>

コシヒカリの生育を前年と比較すると、稈長はやや長く、穂長はやや短くなりましたが、穂数は多くなりました。一方三重23号は、稈長及び穂長は短くなりましたが穂数はやや少なくなりました。また、出穂期はコシヒカリ、三重23号ともに前年より数日早くなりました。

●水稲(コシヒカリ)生育基準田の調査結果 (平成27年8月19日現在)

品種名	調査地点	移植日 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数		出穂期 (月.日)
					(本/m ²)	(本/株)	
コシヒカリ	殿村	4.21	90	19.8	283	23	7/16
	一志町井生	4.25	85	18.2	425	22	7/20

【参考】前年同時期の調査結果 (平成26年8月14日現在)

コシヒカリ	向井	4.26	89	20.6	316	19	7/20
	一志町井生	4.29	81	18.8	317	15	7/19

●「三重23号」実証ほの調査結果 (平成27年8月17日現在)

品種名	調査地点	移植日 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数		出穂期 (月.日)
					(本/m ²)	(本/株)	
三重23号	向井	4.20	79	19.3	408	26	7/10

【参考】前年同時期の調査結果 (平成26年8月14日現在)

三重23号	向井	5.10	81	19.9	365	19	7/16
-------	----	------	----	------	-----	----	------

雑草

本年は水の出入りが少ないほ場で藻の発生がやや多く見られましたが、目立った雑草の発生は見られませんでした。また、雑草イネは、防除の効果がみられ、去年と比較して、全体的には発生は減少したものの、一部で発生が目立つほ場も見受けられました。引き続き、適切な防除が重要となります。

病害虫

<いもち病・紋枯病>

いもち病については、6月下旬から7月上旬にかけて好適感染日があり、防除の徹底等呼びかけたところですが、穂いもちの発生に至るまでの被害はほとんどありませんでした。箱施用剤使用や、適期防除などが引き続き重要となります。

紋枯病の病原菌は、ほ場内および近隣のイネ科・カヤツリグサ科雑草で越冬するため、冬季の畦畔雑草防除が必要です。また、紋枯病が発生したほ場では翌年の水稲作でも発生が多くなる傾向があるため、翌年の水稲作では適切な防除も重要となります。

<その他の病害>

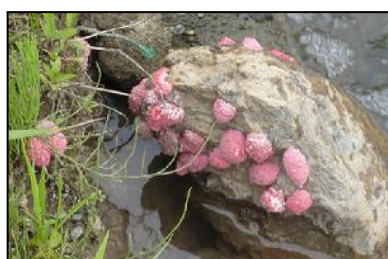
ごま葉枯れ病は、例年みえのゆめでの発生が顕著ですが、本年は、あまり発生しませんでした。

<斑点米カメムシ類>

本年は、6月から7月上旬が最高気温を中心に比較的低温で経過したため、カメムシの発生時期がやや後半にずれたような傾向でした。水稻の生育途中、あまりほ場でカメムシは見られないような感じがありましたが、収穫近くなってきたほ場では、カメムシの飛来が多く見られるようになり、斑点米の被害も多く見受けられました。カメムシ被害対策として、ほ場周囲の荒廃地対策や草刈り、農薬の一斉散布など防除の徹底化が必要です。

<ジャンボタニシ>

近年スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)の発生が問題になっており、津管内でも一部地域で発生が目立ちました。水口や水尻に金網またはネットを貼り、ほ場への侵入を防ぐとともに、発生した場合は、薬剤防除等の適切な防除が必要です。また、越冬場所を除去するための、排水路の泥上げや畦畔の雑草除去も効果的です。ジャンボタニシの防除には、地域全体で行うとより効果的です。



卵塊



成貝

収量

コシヒカリは、昨年と比べ大きく減収しましたが、千粒重はやや大きい傾向です。また、三重23号については、収量、千粒重ともに昨年と比べ減少しました。

品質

平成27年産米の農産物検査結果(農林水産省統計、平成28年2月22日公表)によると、水稻うるち玄米の等級比率は、三重県では1等46.1%、2等50.7%と、全国(1等82.5%、2等14.6%)と比べてかなり悪くなりました。

品種別には、作付比率が高い品種(コシヒカリ、キヌヒカリ)で1等比率が特に低くなりました。

2等以下に格付けされた主な理由は、割合の高い順に、「充実度」「心白・腹白(白未熟粒)」「整粒不足」「着色粒(カメムシ類)」となっています。

8月中旬～9月上旬にかけての日照不足の影響が登熟に大きく影響したものと思われます。

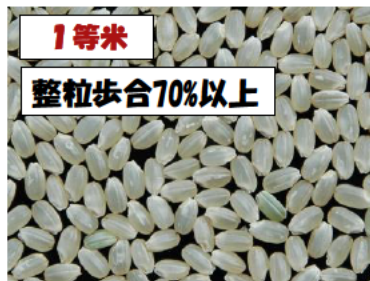
●平成27年産水稻 生育基準田の分解調査結果

区名		もみわら比	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	m ² 粒数 (粒)	玄米千粒重 (g)
コシヒカリ	H27産	1.01	419	425	65	27625	23.4
	H26産	1.05	515	398	75	29890	22.9
一志町井生	H27/H26	-	81%	107%	87%	92%	102%
三重23号	H27産	0.83	454	356	71	25276	23.9
	H26産	1.12	522	344	78	25670	25.0
津向井	H27/H26	-	87%	103%	91%	98%	96%

●平成27年産米(三重県産)の銘柄別検査(農林水産省統計)

	検査数量 (t)	等級比率(%)			
		1等	2等	3等	規格外
水稲うるち玄米計	61503	46.1	50.7	3.1	0.1
コシヒカリ	48237	42.7	54.4	2.7	0.1
キヌヒカリ	4715	37.9	54.5	7.5	0.1
みえのゆめ	1905	76.0	22.8	1.1	0.1
あきたこまち	2671	80.1	18.1	1.4	0.4
みえのえみ	752	59.8	35.7	4.5	0.1
三重23号	653	91.0	9.0	-	-

1等米比率を低下させた白未熟粒とは？



心白

腹白



<品質向上にむけた今後の対策>

○白未熟粒を発生させない

白未熟粒とは米の内部が白く濁るものであり、乳白粒、背白粒、腹白粒、基白粒などをいいます。等級を下げるだけでなく、品質面で消費者からも嫌われます。

本年も白未熟粒(特に心白粒・腹白粒)が格付低下の要因の1つとなりました。

●三重県産コシヒカリの農産物検査結果

(農林水産省統計)

	等級比率(%)			
	1等	2等	3等	規格外
平成27年産	46.1	50.7	3.1	0.1
平成26年産	32.3	63.6	4	0.1
平成25年産	36.1	60.3	3.4	0.2
平成24年産	52.7	45.9	1.2	0.2

近年、登熟期の高温が影響した白未熟粒の多発が全国的に問題となっています。白未熟粒軽減対策として次のことが考えられます。

① 登熟期の水管理

中干し以降は間断灌水に心がけ、落水は収穫7日前以降としましょう。
暑い日中は水温も高いので、夜間通水等により稲体を休める方が効果的です。
なお、近年の夏は少雨傾向であり、高温年には干ばつが懸念されます。渇水時の対応として、湛水でなくても湿潤な状態を保つことが可能であれば実施してみてください。

② 施肥管理(生育後半の窒素を高める)

生育後半の肥料不足が白未熟粒の原因となっています。穂肥の時期をやや遅め(1回目は出穂15日前頃)にし、高温年は2回目の穂肥をやや多めにしましょう。幼穂形成期以降の溶出割合を高めた緩効性肥料も開発されています。また、堆肥の施用及び深耕により、作土を深くすることも効果的です。

③ 移植時期をずらす

この方法は遅い時期まで水利が可能な場所に限られますが、移植時期を遅らせる(概ね5月中旬以降とする)ことによって、登熟期間が最も暑い時期と重ならないよう(概ね8月下旬以降)にします。

福井県では全域で5月中旬以降の移植に取り組むことにより、1等比率を回復させています。

○ 倒伏させない

草丈を抑制し倒れにくい稲を作るために、育苗の段階から次の項目に気をつけて作業をしましょう。

- ・丈夫な苗の確保…茎が太く徒長していない苗を植えましょう。
- ・適正な植え付け本数…太植は茎数過多となり、茎が細くなります
- ・適正な基肥量…窒素過多は生育過剰となります。
- ・適正な水管理…こまめな水管理(間断灌水)と中干しにより田面を硬くします。
- ・ケイ酸資材の施用…ケイ酸を吸収させると光合成能力が高まり、稲を丈夫にします。
- ・紋枯病防除…株元を枯らす紋枯病は倒伏につながります。

○ 籾数を抑える

前半の生育を抑制して、籾数過多を避けましょう。そのためには特に幼穂形成期以降の肥培管理や水管理が重要です。穂肥が早すぎると籾数過多となりやすいので、栽培こよみや生育状況を見ながら、適正な時期に適量を施肥するようにしましょう。